

『現代を生きる子どもの理解と環境作り～発達心理学の視点から～』

平成28年度北海道地域子ども会育成研究協議会・基調講演（抜粋）

北海道大学大学院教育学研究院附属子ども発達臨床研究センター
准教授 川田 学 先生

今現代を生きる子どもの成長を支える環境作りとして4つの視点を出してまとめたいと思います。

今の社会は凄く高学歴になっています。子ども達は一体どこまで学校に行けばいいんだろうというくらい長い学びの中にいます。そのほとんど学びが何の役に立つかわからないというのが現状です。でも、特別なことを学ばなくても、例えば、小さい子どもに折り紙で鶴を一つ折ってあげるととても喜んでくれる。手持ちの力で充分出来るものがたくさんある。それを子ども達が実感するということがとても大事ではないかと思います。

2つ目が問いを共同で作り出すこと。今まで子ども達は学校ではずっと問われる立場にいました。それによって今の学生は何か質問されると答えることは出来るけれども、自分自身で何かを問うことは難しいという風を感じています。大学で扱う問題はほとんど答えが無い問題なのですが、学生たちの多くは「先生それで正解はどれですか」といつも答えを気にしています。問われるだけではなく、自分自身で何か問いを持って、そうして学んでいく、それが大切であり、そういった機会が地域の中でもあれば良いなと思っています。

3つ目は教えることによる学びがあること。自分自身が育てて貰う側から誰かを育てる側に回るということで自分を成長させるということです。そういった教えることによる学びというものも今の子ども達のなかなか得られない学びの機会だと思っています。

4つ目は、より成熟した者同士の対話を観察すること。これもとても足りないという風を感じています。例えば、親戚が集まったりして、大人同士が何かについて話しています。幼児くらいの子供は大人の膝にすっとな乗ってきて、時々聞こえてくる言葉で「ねえねえ、それどういうこと？」と聞いたりします。一方、小学生から中学生くらいの子供は、自我が育ってきて、直接大人と議論するということがまだ少し難しいですが、子ども同士で何かをして遊んでいる時に耳はこちらに向いていたりします。高校生や大学生くらいで少し自分の考えや経験というものが蓄積されていて少し自信を持ってきた子供は時々自分の意見を挟んでみたりして、自分を試してみようとする。このように色々な発達の段階によって会話に対する参加の仕方は異なってきますが、いずれもとても重要なステップだと思います。おそらく人間の発達の中で10代の前半の前半くらいというのは非常にデリケートで傷つきやすい時期です。そういう時にお前はどう考えているんだ、お前の意見を言ってみろ、と言われるのは非常に辛いことで、それよりはもっと成熟した人同士がしている話をじっくり聞いて問われないけど聞くことが許される、そうした環境が10代にとってはとても良い経験、ありがたい経験なのではないかと思います。

以上の4点をこれからの子ども達の環境作りの視点としてあげさせて頂きました。

(平成28年10月22日稚内市)